愛知工業大学研究報告
第２７号Ａ　平成４年

奇妙な出会・ハーディからオウエンまでの戦争詩（1）

ハーディとブルック

吉　賀　憲　夫

Strange Meetings:
War Poems of Hardy to Owen

PART 1. HARDY AND BROOKE

Norio YOSHIGA

Wars are, in a sense, strange meetings of soldiers with their enemies, of one culture with another, of military fame with homely joys of daily life, of life with death. Hardy wrote a few poems about Boer War which was fought in South Africa. His "Drummer Hodge" and "The Souls of the Slain" are the very examples of the strange meetings. The war was a meeting place of Drummer Hodge with strange constellations of Southern hemisphere after he was killed and buried in a lone place of foreign country. "The Souls of the Slain" shows us another case of a strange meeting of two confronting thoughts: military fame and happy ordinary life. Hardy thought that war was pity as Owen thought it so.

Rupert Brooke wrote a famous poem "The Soldier" which reminds us Hardy's "Drummer Hodge" though the tones of the two poems are different. We can notice that there is a subdued ironical atmosphere in Hardy's poems though Brooke's "The Soldier" is rather idealistic and optimistic. The difference of their tones comes from the facts that Brooke was a young promising scholar with English literary background and that he did not know what the modern war was like since the war was still young. On the contrary, Hardy was an old prominent novelist and poet who had enough experience to understand pity of war.

奇妙な出会・ハーディからオウエンまでの戦争詩（1）

ハーディとブルック

吉賀憲夫

戦争詩を考えるとき、W・B・イェイツ（W. B. Yeats）の言葉を避けて通ることは難しい。彼は『オックスフォード現代詩歌集（The Oxford Book of Modern Verse）』の編集にあたり、その序文で「私は大戦のさなかに書かれたある種の詩に不快感を覚える。“I have a distaste for certain poems written in the midst of the great war.”（注一）」と書いている。まず彼はそのような詩を書いた「書き手」（彼は詩人“poets”とは書かず“writers”と書き表している）は勇敢な将校であり、皆戦功勲章を授けられているであろうと思うと言う。彼は恵まれた将校と、戦争の真の犠牲者たる兵卒を明確に区別しているのは明らかだ。かつ「戦功勲章」という言葉には彼の軽蔑の気持すら感じ取られる。さらに彼はそれら「書き手」が書いたものには、彼らの部下たちの苦しみを弁護するかのような傾向があるように感じられるとし、次のように述べている。

In Poems that had for a time considerable fame, written in the first person, they made that suffering their own. I have rejected these poems for the same reason that made Arnold withdraw his Empedocles on Etna from circulation; passive suffering is not a theme for poetry.（注二）

（しばらくの間、大変な名声を博したり、一人称で書かれた詩の中で、彼らは兵卒らの苦しみを自分達自身の苦しみにすりかえてしまった。私はアーノルドが彼の『エトナ山頂のエンペドクレス』を回収したのと同じ理由でこれらの戦争詩を排除した。二番煎じの苦痛は詩の主題とはならないからである。）

戦争詩人達は彼らの部下の苦しみを、あたかも自分自身の苦しみであるかのように置き換えてしまった、と彼は非難する。そしてマッシュー・アーノルドの例を引き、自らが真に経験した苦悩ではなく、他人の苦しみの「受け身的苦悩」、言い替えれば「二番煎じの苦痛」は詩の主題とはならない、と言い放つのである。さらに結論として、戦争の苦しみは忘れてしまうのが一番と彼は言うのである。続いて彼は、ボーア戦争から帰還した兵が大笑いしながら戦いの話をする様を引用している。それは砲弾の破片に当たり内臓を引きずりながら、まるでダンサーのようにのたうちまわったある嫌われ者の軍曹の例であった。そしてイェイツは言うのである、「これもまた正しい戦争の見方かもしれない」と。そして彼の言う「正しい戦争の見方」の一例として、アイルランドのトラディショナル・ソング“Johnny, I Hardly Knew Ye”を挙げるのである。

確かにイェイツは、あの大戦中は寡黙であった。『戦争詩を頼まれて“On Being Asked for A War Poem”』において彼は自分の考えを次の

ように言っている。

I think it better that in times like these
A poet's mouth be silent, for in truth
We have no gift to set a statesman right;
(“On Being Asked for A War Poem,” ll. 1-3.)

(このようなご時勢では詩人の口は
沈黙が一番。というのもわれわれは政治家を
矯正するような才能は与えられてはいないから。)
『戦争詩を求められて』(一～三行)

また彼のその数少ないの言及の一つは、彼の良き理解者であり支持者であったグレゴリー伯爵婦人の息子であるロバート・グレゴリーの死後の作品“An Irish Airman Foresees His Death”である。この詩はイェイツの死後まで発表されることはなかったが、ここで彼はアイルランド人の飛行士の口を借りて、次の様に言っている。

Those that I fight I do not hate,
Those that I guard I do not love;
My country is Kiltartan Cross,
My countrymen Kiltartan's poor,
No likely end could bring them loss
Or leave them happier than before.
Nor law, nor duty bade me fight,
Nor public men, nor cheering crowds,
A lonely impulse of delight
Drove to this tumult in the clouds;
(“An Irish Airman Foresees His Death,” ll. 3-12.)

(私の戦う相手を私は憎んでいるわけではない。
私の守る人々を私は愛しているわけでもない。
私の国はキルタータンの十字架、
私の国の国民はキルタータンの貧しい人たち、
どのような戦いの終わり方も彼らに損害をもたらさないし、
また彼らを以前にもまして幸せにするわけでもない。
法も義務も、政治家も喝采する群衆も
私に戦うことを命じはしなかった。
喜びの孤独な衝撃が
雲間のこの興奮へと駆り立てたのだ。)
『アイルランドの飛行士は自からの死を予見する』(三～一二行)

この一節は当時のアイルランドの置かれた状況を良く物語っているといえよう。英国の支配下にあったアイルランド人にとって、大戦の行方は大した問題ではなかった。アイルランドの運命とは無縁のところで戦いは行われていたのであった。しかし皮肉なことにその彼らにもその戦争による死は着実に訪れたのだった。イェイツが言及したアイルランドの古謡“Johnny, I Hardly Knew Ye”は、アイルランドでは貧しいため、好むと好まざるとによらず、他人(イングランド人)のためにインドやセイロンで傭兵として戦い、傷つき、見るも無惨な姿となり帰国したアイルランドの若者ジョニーを歌った一八世紀末の歌であった。何百年も前からアイルランドはこの様な状況に置かれていたのであり、アイルランド人イェイツにとって、大戦下にイングランド人将校によって作られた戦争詩は二番煎じの苦痛としかうつらなかったのかもしれない。この

様な状況の中で、イェイツにとって戦争詩とは注目に値するものとは思われなかったのであろう。逆に彼にとって戦争とは「すべてが変わった、完全に変わった、恐ろしい美が誕生した。“All changed, changed utterly:/ A terrible beauty is born.”（注三）」と詠った一九一六年四月二四日のダブリン市における失敗に終わったアイルランド独立のための反乱や、『再臨 “The Second Coming”』における反キリスト教徒（Anti-Christ）との戦いといったものであった。

イェイツの言葉は確かに貴重ではあるが、少し主観的なきらいがある。第一次大戦下の戦争詩は、たとえそれがイェイツの言うように彼の趣味にあわなくても、それまでの詩歌には無いそれ自体の意義や意味、またその存在価値を十分に有しているのであり、またそれらは既に、その後も数多くの戦争を経験した二十世紀に生きる者への貴重な遺産となっていることは否定できない。

本稿では、第一部において南アフリカで戦われたボーア戦争に題材をとったトマス・ハーディ（Thomas Hardy）の詩と第一次世界大戦におけるルパート・ブルック（Rupert Brooke）を、そして第二部ではシーグフリード・サスーン（Siegfried Sassoon）とウイルフレッド・オウエン（Wilfred Owen）の詩を考察し、そこに表れている詩人達と戦争との「奇妙な出会」に関する想いについて考えてみたい。

2

イギリスの今世紀の戦争詩人と戦争詩を考えるとき、ハーディの文学的言及のあるボーア戦争からまず考えてみたい。

ボーア戦争（1899～1902）はナポレオン戦争から第一次世界大戦の間に起きた最大の戦争であった。ボーアとは南アフリカのオランダ系移民の子孫を指す言葉である。一六五二年オランダ東インド会社が喜望峰に船舶業務に従事する職員や兵士を派遣して以来、この地はオランダ系移民の根拠地となったが、一八〇六年ナポレオン戦争の結果、この地方はケープ植民地として英国の統治するところとなった。奴隷解放政策等をとる英国行政に不満を持つボーア人は一八五二年、未開の地域にトランスヴァール共和国とオレンジ自由国の二国として独立が認められた。ところが一八八六年からこの地方で金やダイヤモンドの鉱山が次々と発見される。それらを求めて英国系移民が殺到し、これを防ぐためにボーア人国家は英国系移民に重税を課して抵抗した。ここにボーア人国家と宗主国たる英国との間に政治的軋轢が生まれ、一八九九年十月十二日に両者は戦争状態に突入して行った。初戦は英国の敗北、その後本格的軍事力の投入で英国の優勢は確固たるものとなったが、ボーア人はゲリラ戦で抵抗、戦争は長期戦となった。ボーア人は一九〇二年事実上降伏した。

ボーア戦争は英国から遠く離れた異国の地で行われた戦いであり、それはまだ第一次大戦のような国家総力戦でもなく、機関銃、戦車、飛行機、毒ガス兵器といった戦争をより悲惨にする兵器等もまだ出現してはいなかった。英国は初戦の敗北に驚愕したとはいえども、それはまだ余裕のある植民地戦争であり、その意味では来るべき大戦とは趣をまだ大いに異にしていたといえよう。

小説家であり詩人であるトマス・ハーディはボーア戦争に題材を採った詩を幾編か書いているが、それらはその後の戦争詩をある面で先取りするものであった。デズモンド・ホーキンズはその著書『小説家詩人ハーディ』の中で次のように述べている。

> Among the Boer War poems two stand out with a surprisingly modern accent that already anticipates Sassoon and Owen. ‘The Souls of the Slain’ is a majestic visionary piece which exploits Hardy’s fine control of a compassionate irony. ‘Drummer

Hodge' sets out a plain and luminous statement that invalidates in advance Rupert Brooke's 'Corner of a foreign field/ That is for ever England'.（注四）

（彼のボーア戦争に関する詩の中の二編は、サスーンやオウエンを既に予期させる驚くべき現代的しらべで際だっている。『戦死者の魂』は彼の立派に抑制された憐憫の情に満ちた皮肉を十分に駆使した堂々たる幻想的作品である。『鼓手ホッジ』はルパート・ブルックの「異国の野辺の片隅は／とわにイングランド」をも既に顔色なからしめるほどの率直で明快な陳述となっている。）

後述するブルックの純粋な愛国心の横溢した作品とハーディの『鼓手ホッジ』はその主題において同一の趣向を詠ったものであり、共に読む者に深い印象を与えるのではあるが、しかしハーディの鼓手ホッジの死に対する優しい憐憫の情とその背後にある、ある種のむなしさ、はこの作品を特に特徴付けている。

They throw in Drummer Hodge, to rest
Uncoffined—just as found:
（"Drummer Hodge," ll. 1-2）

（彼らは投げ込む鼓手ホッジを、埋葬のため
発見されたままの姿で棺にも納めず。）
『鼓手ホッジ』（一～二行）

激戦の後の常なのであろうか、ホッジの死体は発見された時と同じ状態で棺に納められることもなく埋葬される。彼を墓穴に「投げ込む」の

は「彼ら」であり、敵か味方かも不明である。この「彼ら」が当然味方の兵士たちであったとしても、この「彼ら」と「投げ込む」という言葉からホッジ個人の死を悼む「彼ら」の気持ちは伝わってこない。これが戦争の常であることは言うまでもない。彼の墓の目印となるものはアフリカの「丘の頂（copje-crest）」であり、彼の墓を見守るものは異郷の見知らぬ星座である。

And foreign constellations west
Each night above his mound.
（"Drummer Hodge," ll. 5-6.）

（そして異国の星座はその塚の上
夜毎西へと巡る。）
『鼓手ホッジ』（五～六行）

異国の星座は若い不運のホッジを優しく見守る唯一の墓参者であり、異国の地と化したホッジの唯一の慰めであろう。"foreign"という星座を修飾する言葉は、ホッジの生まれた英国のウェセックスから遠く離れた南アフリカを意味するだけでなく、そのような所までこの若者を故郷から駆り出したこの戦争の本質すら暗示している。この語は第二連では"Strange"となり、また最終連の第三連では"strange-eyed"と変わって行く。

Yet portion of that unknown plain
Will Hodge for ever be;
His homely Northern breast and brain
Grow to some Southern tree,

And strange-eyed constellations reign
His stars eternally.
（“Drummer Hodge,” ll. 13-8.）

（しかしあの見知らぬ平原の一部は
永遠にホッジのものとなろう。
彼の素朴な北の生まれの胸や頭は
なにかの南国の樹に育ち、
そして不思議な目をした星座が
彼の運命を永久に支配する。）
『鼓手ホッジ』（一三～一八行）

第二連の「見知らぬ星たち（strange stars）」や「不思議な目をした星座（strange-eyed constellations）」の“strange”は、故国を離れ異境の地に死ぬホッジの「奇しき」運命、そのホッジと南国の星座の「奇妙な」出会の意味をも含んでいるといえよう。北の生まれのホッジが南の国の戦争で命を終えるという人生のアイロニーと戦争の不条理を南国の星座が不思議の目で見つめる構図は、詩人ハーディの戦争に斃れた者への優しい思いやりとやるせなさを示すものである。異国の地と化したホッジの運命に対するハーディの意識の底に漂う“strange”という感覚は、何か人間には理解できない運命に操られるはかない人間存在に対する哀れさと憐憫の情を暗示させるのである。

次に同じくボーア戦争に関係する彼の作品『戦死者の魂“The Souls ofthe Slain”』を見てみよう。この詩は南アフリカとイギリスを結ぶ線の中間点にあたる、暖流と寒流が出合うためいつも荒れているビルオブポートランド島沖の海域で、南アフリカの戦場から故国イギリスへと向かう「南回帰線の南で戦い斃れた者の魂“For souls of the felled / On the earth'snether bord/ Under Capricorn”（注五）」が、イギリスから来た先輩格の亡霊と出会うという設定の、これもまた『奇妙な出会』の物語となっている。北から来た先輩の霊は、名誉を得て喜々として故郷へ向かう後輩の魂に、肉親は彼らの死の栄光を決して喜んでいるわけではないことを告げる。

8

'Some mothers muse sadly, and murmur
　Your doings as boys—
　Recall the quaint ways
　Of your babyhood's innocent days.
Some pray that, ere dying, your faith had grown firmer,
　And higher your joys.

9

'A father broods: “Would I had set him
　To some humble trade,
　And so slacked his high fire,
　And his passionate martial desire;
And told him no stories to woo him and whet him
　To this dire crusade!”'
（“The Souls of the Slain,” ll. 43-54.）

八

（「ある母親らは悲しげに物思う、そして呟く
　少年の時の君らの行為の数々を--
　そしてまた思い出すのだ、君の

赤ん坊時代の無垢の日々の不思議な仕草を。
ある母は祈る、君の信仰が死ぬ前により強固なものになったことを、
そして君の喜びがより増したことを。」

九

「父親は深く思うのだ、『もし息子を何か
ささやかな職に付けておいたら
そして激しい気性と、
武勇への強い憧れを鎮めておいたら、
そして息子がこの悲惨な十字軍に興味を持つような
話をしてやらなかったら！』）
『戦死者の魂』（四三～五四行）

若者の魂は父母や妻の嘆きを伝えられ、彼らが今まで信じてきた価値観に動揺をきたす。

12

—'Alas! then it seems that our glory
Weighs less in their thought
Than our old homely acts,
And the long-ago commonplace facts
Of our lives - held by us as scarce part of our story,
And rated as nought!'

13

Then bitterly some: 'Was it wise now
To raise the tomb-door
For such knowledge? Away!'
But the rest: 'Fame we prized till to-day;
Yet that hearts keep us green for old kindness we prize now
A thousand times more!'
("The Souls of the Slain," ll. 67-78.)

十二

（—「ああ！それではぼくらの栄光は
昔の家庭的な行為や、
あの古い昔のありふれた真実より
立派なものではないと父母は
思っているらしい。ぼくらはそれを人生では些細で、まったく
意味のないものと思ってきた。

十三

するとある者は苦々しく言う、「墓所の扉を
今開けるのは賢明な事だったのか、
そんな知識のために。さあここから立ち去れ！」と。
しかし他の者は言う、「今日までぼくらは名声をよしとした。
しかしその心が今はその千倍以上によしとする昔ながらの思いやりを
理解することを妨げてきたのだ。）
『戦死者の魂』（六七～七八行）

真実を知り死者の魂は、それを苦々しく思う者と故郷で善い息子であった者とに分裂し、前者は海中に身を投げ、後者は喜々として故国を目指し北へ向かう。この詩においてもやはりハーディの目は戦争の「犠牲者」である戦死した善良な兵士達とその肉親へと向けられるのである。

残された親や妻の悲しみは戦死した若者たちの悲しみ以上に大きいものがある。ハーディのそのような弱者に向けられる暖かい憐憫の情は、もう一方で戦争のむなしさ、悲しさを告発しているのである。

ハーディはまた馬を愛した。そしてその馬もまた戦争の犠牲となっていった。『乗船した馬（"Horses Aboard"）』には彼の馬への愛と戦争への怒りを見ることが出来る。

出港を待つ巨大な船には馬が列をなして立っている。馬は何処に行くのか、何のために行くのか、どうやって行くのか知らない。

They are horses of war,
And are going to where there is fighting afar;
But they gaze through their eye-holes unwitting they are,
And that in some wilderness, gaunt and ghast,
Their bones will bleach ere a year has passed,
And the item be as "war-waste" classed.—
And when the band booms, and the folk say "Good-bye!"
And the shore slides astern, they appear wrenched awry
From the scheme Nature planned for them,—wondering why.
（"Horses Aboard," ll. 5-12.）

（あの馬らは軍馬なのだ。
そして遠く戦いのある方へと行くのだ。
しかし彼らは自分らがそうであることも知らず目の部分にあいている
穴を通して見つめる。
そして荒涼とした、ぞっとする荒野で
彼らの骨は一年経つ前に白骨となるであろうことも、
そして自分らは「戦争消耗品」に分類されていることも知らない——
そして楽隊が演奏し、民衆が「さようなら」を言い、
そして舷側が岸を離れる時、彼らは「自然」が自分らのために
企画した計画から無理矢理離されるように思うのだ、何故だろうと
いぶかしがりながら。）

『乗船した馬』（五～一二行）

戦場に送られる馬は、自分達の運命を知らない。しかし人間には馬が「戦争消耗品」であり、一年も経たない内に死んでしまうだろうということも分かっている。しかその馬でも、今彼らが置かれている状況が自然の理念に合わない理不尽なことであることに気づいていると、詩人には思えるのである。馬がその使命を果たすべき場所と仕事から無理矢理引き離され、本来の使命と違う事に使われ、むなしく死んで行く事実はそのまま、故郷でありふれた昔ながらの日常生活送るはずであった若者らが戦争へと送られて行く姿と二重写しに見えてくる。馬に対する愛情もさることながら、その言葉の背後には戦争の不条理に対する怒りすら感じられる。

この詩は作成時期は定かではないが、たとえば一二行目の"afar"や一四行目の"some wilderness, gaunt and ghast"に暗示されているように、彼は第一次大戦というよりも、ボーア戦争を念頭において作ったものと考えられている。(注六)ハーディは馬を愛したし、また戦場に送られる馬を不憫に思ったが、これは必ずしもハーディ一人に限られたわけではない。イギリスの中産階級以上の者にとってそれは共通した思いであったであろう。シーグフリード・サスーンも『ある歩兵将校の回想（Memoirs of Infantry Officer）』の中で騎兵隊の馬の無事である事を祈る。

The Cavalry were still waiting for their chance on the Western

Front. . . . Would they ever get it, I wondered. Personally, I thought it would be a pity if they did, for I disliked the idea of a lot of good horses being killed and wounded, and I had always been soft-hearted about horses.（注七）

（騎兵隊はまだ西部戦線で自分達の出番を待っている…… でもそのようなチャンスは有るだろうか。個人的にはそんな事になるとかわいそうだという気がする。というのは私は立派な馬が殺されたり傷を負うということを考えるだけでも嫌だから。そして私はいつも馬に関しては優しい心でいる。）

戦場へ送られる馬を悲しく見送るのは、決してイギリス人だけではない。第二次大戦中に三人の息子を失った歌人、半田良平もまたそうであった。

たたかひに召さるる馬が連なりて暑き路上をけふも行きけり（注八）

ここでは馬はサスーンのように作者の直接の愛情の対象としてではなく、うち続く戦争とその犠牲者の象徴として詠われている。その意味において、トーンといい、その内容といいハーディの詩により近いと言える。

3

「あの見知らぬ平原の一部は／永遠にホッジのものとなるであろう」とハーディが詠った同じ主題で美しい詩を残したのは、第一次大戦の初期、一九一五年春のダルダネルスの作戦で死んだルパート・ブルックであった。

彼は一八八七年ラグビーに生まれ、ラグビー校からケンブリッジのキングズ・コレッジに学び将来を嘱望される学生となった。一九一一年にキングズ・コレッジのフェローとなったが、一九一四年八月、第一次大戦勃発と共に海軍将校に任じられた。

一九一五年になると、英国海相チャーチルは西部戦線でのおびただしい損害、東部戦線での膠着からの脱却と、あわせて自国の勢力圏を広げることを目指した作戦をダルダネルスに開始した。結果は連合国側の惨憺たる失敗に終わり、海軍は戦艦を含む多数の艦船を失い、四一万人の連合軍は二五万人の損害を出した。この作戦においてブルックは敗血症のため一九一五年四月、病院船で死亡した。

彼の死後一九一五年中に、彼の詩集が発行されたが、その中の『兵士“The Soldier”』は大成功をおさめ、彼は一躍伝説的詩人となったのであった。そこでは大戦突入時のイギリスに充満していたであろうような熱烈な愛国の情があふれている。

If I should die, think only this of me:
That there's some corner of a foreign field
That is for ever England. There shall be
In that rich earth a richer dust concealed;
A dust whom England bore, shaped, made aware,
Gave, once, her flowers to love, her ways to roam,
A body of England's, breathing English air,
Washed by the rivers, blest by suns of home.

（“The Soldier,” ll. 1-8.）

（もし私が死んだら、私のことをこのように思い出してくれ

異国の野辺の片隅に
永遠にイギリスである所があることを。
その豊かな土地にはより豊かな塵が隠されている。
その塵とはイギリスが生み、形作り、目覚めさせ、
かつて、愛すべき花を、散策すべき道をそれに与えたのだ。
それはイギリスの空気を呼吸したイギリスの遺骸であり
故郷の川に洗われ、故郷の太陽に祝福されたものなのだ。）

『兵士』（一～八行）

ここでは、自分が埋葬される場所は永遠にイギリスのものとなるという信仰にも似た愛国心が、極限まで純化された形で表現されている。そこにはまだ悲壮感はなく、さわやかな楽天感さえ感じられる。ハーディの前述の詩には楽天的なトーンは決してみられなかった。この差は六十歳になるハーディと二八歳で死んだブルックの差であり、小説家としてまた詩人としての長い経験の持ち主と、エリート青年学者との差でもあろう。そしてそれはまた恐らくブルックが近代戦の真の苛烈さを認識していなかったことによるのかもしれない。

しかし翻って考えてみると、はたしてこの詩を読み、これを戦争と即座に結び付けることが可能であろうか。読者がこの詩人について前もって知っていて、なおかつタイトルを読めばそれと気づくことは確かであろう。しかし詩自体からは、どのようにしてそれが読み取れるであろうか。かろうじて“foreign”という言葉だけが、かすかにそれを暗示するにすぎないのである。そしてそれはハーディの詩と唯一共通する、たいへん重要なキーワードでもある。すなわちその言葉の示すところは、戦場は常に国外であり、戦いは祖国防衛のためではなく外征であったという事実であり、それは当時の大英帝国の宿命であったのである。

しかしこのブルックの詩において注目しなければならないことは、この詩に流れているロマンティシズムは『鼓手ホッジ』と共通するものではなく、むしろシェークスピアの『大嵐』の中のエアリエルの歌の系譜に属するものであるということである。

Nothing of him that doth fade,
But doth suffer a sea-change
Into something rich and strange.

(The Tempest, I, ii, 400-2.)

（彼のいかなるものもむなしく朽ちはてはしないで
海の変化の力を受けて
何か豊かな奇しきものへと変わって行く。）

『大嵐』（一幕二場四〇～二行）

ブルックはまだ良き文学の伝統にそって、死や戦争を眺めることが可能であった。しかし大戦が熾烈さを増して行く中、戦争詩人たちには戦争は激しい憤り、死はもはや絶望以外の何物でもなくなったのであった。

（つづく）

注

一. W. B. Yeats, The Oxford Book of Modern Verse 1892-1935 (Oxford University Press, 1936), p. xxxiv.
二. Ibid., p. xxxiv.
三. Yeats, “Easter 1916,” ll. 15-6.
四. Desmond Hawkins, Harday: Novelist and Poet (London and

Basingstoke:Papermac,1981), p. 172.

五. Thomas Hardy, "The Souls of the Slain," ll.26-28.

六. F. B. Pinion, A Commentary on the Poems of Thomas Hardy (London and Basingstoke: Macmillan, 1976), p.221.

七. Siegfried Sassoon, Memoirs of An Infantry Officer (Faber & Faber), p.128.

八. 半田良平、『日本の詩歌、第二九巻「短歌集」』（中央公論社、東京、一九七六年）九七頁

テクスト

一. W. B. Yeats (ed.), The Oxford Book of Modern Verse 1892-1935 (Oxford University Press, 1936)

二. W. B. Yeats, The Collected Poems of W. B. Yeats (2nd. ed., Macmillan, 1971)

三. James Gibson ed., The Variorum Edition of the Complete Poems of Thomas Harday (Macmillan, 1979)

四. Jon Silkin ed., The Penguin Book of First World War Poetry (2nd. ed., Penguin Books, 1988)

五. Siegfried Sassoon, Memoirs of An Infantry Officer (Faber & Faber, 1965)

六. Shakespeare, The Riverside Shakespeare (Boston:Houghton Mifflin Co., 1972)

参考文献

一. Barry Tomalin(compiled), Songs Alive (London, BBC, 1977)

二. James Reeves, Georgian Poetry (Penguin Books Ltd.,1962)

三. Tom Paulin, Thomas Hardy:The poetry of Perception, (2nd ed., Macmillan, 1986)

四. ジョン・マクドナルド著、村松（監訳）『戦場の歴史』、川出書房新社（東京）、一九八六年

五. 金子常規『兵器と戦術の世界史』、原書房（東京）、一九七九年

六. 「戦争の世界史」、『歴史読本ワールド・特別増刊・八七-四』新人物往来社（東京）、一九八七年

七. 『岩波講座世界歴史、第二四巻、現代1』、岩波書店（東京）、一九七〇年

八. 渡辺昇一『ドイツ参謀本部』中央公論社（東京）、一九七四年

（受理　平成四年三月二十日）